

フランス語における主題の概念と遊離構文

吉川直世

§0. はじめに

本稿の分析対象は、つぎのような二種類の構文である。

- (1) Pierre, il n'est pas venu.
- (2) Il n'est pas venu, Pierre.

以下、(1)の型の文を文頭遊離構文、(2)の型の文を文末遊離構文とよぶことにする²⁾。

文頭遊離構文は、主題化という機能をもつことは明白である。近年の研究の流れは、主題であることには疑問の余地のない文頭遊離要素が、先行の文脈とどのような係わりをもっているのか、という談話文法的ないしは語用論的分析に向かっている³⁾。この傾向は主題の概念の定義を試みる研究にも見られ、扱われている文頭遊離要素の例は、ほとんどの文献において、先行文脈との関係が観察しやすい名詞句の場合に限られており、どのような統辞的要素が主題として文頭遊離の位置に立ちうるのか、あるいは立ちえないのかという文レベルで明らかにしうる事実がもつ意味については、ほとんど考察されていないのが現状である。本稿の目的は、文頭遊離要素の分析を通して主題の概念を明らかにすることにあるが、そのためには、文レベルで明らかにしうる事実と談話レベルで明らかにしうる事実を峻別しなければならないということ、主題の一定した特徴、いわば最大公約数は、文レベルに積極的にとどまっただけのみ明らかにしうるということを主張する。

(2)の型の文については、従来、(1)の型の文に対していわゆる鏡像関係にある文としてみなされてきた。言葉を換えれば、文末遊離要素は主題が後置されたものである、と考えられてきている。本稿の目的は、(2)の型の文における文末遊離要素は、(1)の型の文における文頭遊離要素と鏡像関係にあるのではないということ、文頭遊離要素が主題という意味レベルに属する概念を表わすのに対して、文末遊離要素は補足的情報という情報レベルに属する概念を表

わす、ということを手張することにある。

§1.0 主題の概念について

主題の概念の伝統的定義は、たとえば Wagner & Pinchon (1962, p. 22) に見られるように、「何かが述べられる対象となるもの」(tout ce à propos de quoi on formule quelque chose) としてよいであろう。この定義のほかにも、いくつかの定義が試みられている。たとえば Chafe (1976, p. 51) は、topic という用語に対して、「文が語る対象となるものというより」(not so much what the sentence is about), 「文が成り立つ枠組」(the framework within which the sentence holds) であるという定義を与えている。また Li & Thompson (1976, p. 464) は、topic を談話における「注意の中心点」(center of attention) であるとしている。さらに Halliday (1967, p. 212) は、theme という用語に対して、「話られている対象となっているもの」(what is being talked about) という特徴づけをしながらも、形態的には「節において最初に来るもの」(what comes first in the clause) という定義を与えている。Halliday にとっては、Did John see the play? における did, What did John see? における what でさえ theme である”。

このように、各論者の採る理論的枠組によって主題の概念の捉え方はかなり異なっている。本稿における主題の概念に対する考え方は、主題の概念は、伝統的定義である「何かが述べられる対象となるもの」という定義が表わしているように、純粋に意味的な概念であり、形態的には決して規定できない性質のものであるということである。

主題が無標の場合には主語として現われるということは、異論のないところであろう。たとえば、

(3) Elle est intelligente.

は、主語 elle が表わす「彼女」について語っている文である。しかしながら、注目しなければならないことは、主題は、文において、単一の統辞的構成素として実現されるとは限らないということである。つぎの文を見よう。

(4) Oui, c'est une maison, donc, typiquement bourgeoise qui doit dater de la seconde moitié du XIX^e siècle, et c'est là que les parents de Proust se sont installés. *Il n'est pas né là, parce que pendant la Commune son père avait mis sa mère à l'abri,*

si je puis dire, dans ce qui était à ce moment-là une campagne et une banlieue, à savoir Auteuil. Mais c'est tout de même là qu'il a passé toute son enfance pendant longtemps. (Marcel Proust à Paris, avec Roland Barthes, N°1)

イタリック体の文中の主語 *il* は、この文脈においては、主題であるとは考えにくい。この文は、「彼、ブルースト」について語っているというよりは、「彼が生れた所」(le lieu où il est né) について語っている文である。「ブルーストが生れた所はそこではない」と、Barthes は言っているのである。このような主語と主題の不一致は、話し手側のいわば労力の節約に一つの原因を求めることができるように思われる。

文頭遊離の位置においては、いわば特権的に、統辞的に独立した形で、主題が現われる。したがって、主題の概念を明らかにするためには、文頭遊離の位置にどのような要素が立ちうるか、あるいはむしろ立ちえないかを観察することが有効であると思われる。主語が主題を表わすとは限らないのに対して、文頭遊離要素は常に主題を表わす、という観察の上で好都合な事情があるからである。

§ 1.1 主題の概念と既知性

文頭遊離要素が表わす主題が既知要素 (élément donné) であるか否かという議論がある。Larsson (1979, p. 12) は、文頭遊離要素が表わす主題は通例は「先行の言語的文脈によって与えられた要素」(élément donné par le contexte linguistique précédent) であるが、常にそうであるわけではない、と述べている。Galambos (1980, p. 130) は、主題は一般的には既知であるが、既知要素は単に主題の候補である、と記している。また Lambrecht (1981, p. 60) は、主題の指示対象の広い意味での既知性 (givenness) は単に必要条件であって十分条件ではない、と主張している。このように、多くの論者は、文頭遊離要素が表わす主題が既知要素であるとは限らない、ということを描している。このことは観察のレベルに属することであるが、実際、正しい観察である。

たとえば、限定辞として所有形容詞をもつ名詞句の指示対象は、新情報でありうる。

(5) Vous êtes croyant? / Je ne suis pas croyant, mais je crois beau-

coup à la valeur humaine de cette croyance. *Mon problème*, c'est d'intégrer toutes ces dimensions de l'homme à un maxisme compréhensif. (Radioscopie, I, p. 97)

- (6) Nous n'avons pas encore parlé de la censure. Est-elle un bien nécessaire ou bien un mal profitable? Moi, je suis contre toute censure. / J'ai l'impression qu'elle se modernise pas mal, non? On permet des tas de choses qui étaient interdits avant? *Mes premiers films*, ils étaient très chastes, en fin de compte, à côté de ce qu'on voit maintenant. (Radioscopie, I, p. 30)
- (7) Enfin, rendez-vous compte: les Funambules fermés..., et *votre femme, votre petit garçon, votre père, toute la troupe*, c'est pas possible que vous les ayez tous oubliés d'un seul coup! (Les enfants du paradis, ふらんす, 3, 1978, p. 50)

上例における文頭遊離要素の指示対象は、同じ指示対象をもつ言語形式が先行文脈に現われていないという意味において、明らかに既知事項ではない。

つぎの例は、関係節を伴う例であるが、これもまた、明らかに既知事項ではない。

- (8) C'est toi qui a sonné, Riton? Tu veux que je fasse ton lit? / Non... Pour te demander un service... *Les souliers blancs à lainières qu'on a regardés hier, dans la vitrine*...tu en a toujours envie? (Thérèse Raquin, ふらんす, 8, 1980, p. 35)
- (9) C'est vous qui me faites peur. Vous êtes gentil, toujours gentil...Vous êtes bon, *ce que vous faites pour votre femme*, très peu le feraient. (Police Python 357, ふらんす, 10, 1978, p. 27)
- (10) Il n'y a pas d'année pour l'architecture. Rien à voir avec le vin! L'architecture est une chose éternelle, une continuité. C'est la vie. *Ce qui me passionne*, c'est le problème de son application à l'homme. (Radioscopie, 1, p. 199)
- (11) Avant le soir où nous nous sommes rencontrés, que faisais-tu? / *Celui que j'étais avant de te connaître*, je l'ai oublié. (La beauté du diable, ふらんす, 4, 1981, p. 37)

一般には主題が既知事項であることが多いということは、容易に予測されるところであるが、既知事項でない場合があるということを見た。しかし、先行文

脈との言語的なつながりがないとすれば、他に何らかのつながりを保証する要素はないのかという疑問が起こってくる。実際、例文(5)～(11)において観察すべきことは、それぞれの文頭遊離要素の指示対象が、先行文脈に現われていないという意味において、既知事項ではないにせよ、話し手あるいは聞き手が限定辞である所有形容詞あるいは関係節中の代名詞の形で現われていることである。発話の場合あるいは状況につながるこのような要素の存在が主題としての文頭遊離要素を可能ならしめているように思われる。

このように見てくると、主題を表わす文頭遊離要素が既知事項であるか否かという議論は、大きな意味をもたないことが分かる。そこで、Larsson (1979, p. 12) が主張しているように、文頭遊離要素は「状況および先行の言語的文脈との関連において動機づけられた主題」(thème motivé par rapport à la situation et au contexte linguistique précédent) であると主張したくなる。確かに、文頭遊離要素の指示対象は、直接的あるいは間接的に、先行文脈あるいは発話状況につながりのあるものでなければならないということが言えるであろう。また、Galambos (1980, p. 126) が主張しているように、主題の概念が「談話依存の概念」(discourse dependent notion) である、ということも確かなことである。しかし、注意しなければならないことは、文頭遊離要素のこのような特徴づけは、文頭遊離要素が表わす主題がいわば最大公約数としてどのような特徴をもっているかを明らかにするものではない、ということである。なぜなら、このような包括的な定義を行なうことによって、文レベルで明らかにしうる事実が覆いかくされてしまうことになるからである。次節でさらに述べるように、文レベルに積極的にとどまって、どのような要素が文頭遊離の位置に立ちうるか、あるいは立ちえないかを検討することによってのみ、主題の最大公約数を明らかにすることができるのである。本節で出発点として取りあげた、主題が既知要素か否かという議論は、文レベルではなく談話レベルに係わる問題であり、したがって、主題の最大公約数を明らかにする性質のものではないのである。狭い意味での既知性、すなわち、先行文脈に同じ指示対象をもつ言語形式が現われているという意味での既知性は、すでに見たように、主題の必要条件でさえないのである。

§ 1.2 文頭遊離要素の容認可能性と適合性

前節で見た Larsson および Galambos の定義は、文頭遊離要素が表わす主題が先行文脈あるいは状況に適合していなければならないという、談話レベ

ルでの特徴づけである。主題として適切か否かということ、いいかえれば、文頭遊離要素の適合性 (*compatibilité*) とよぶべきものは、文レベルにおける文頭遊離要素の容認可能性 (*acceptabilité*) の問題とは別個のものである。文頭遊離要素は文レベルでは容認可能であっても、先行文脈との係わりにおいては不適切でありうる。つぎの例を見よう。

- (12) Paul s'arrête au bord de la route. *Paul, il serre le frein à main. (Corblin, p. 25)
 (13) Paul s'arrête au bord de la route. ?Le frein à main, il le serre. (Ibid.)

(12)において後半の文が不適切であるのは、前半の文ですでに主題であるものを殊更主題として取りあげているからであり、(13)において後半の文がおかしいのは、主題としていささか唐突であるからである。Larsson および Galambos による主題の定義は、結局は、このような主題の適合性を問題にしているのである。語用論的ないしは談話文法的分析は、文頭遊離構文がどのような場合に用いられるかという、いわゆる談話機能を明らかにする性質のものであって、文頭遊離要素が表わす主題の概念そのものを明らかにすることはできないのである。主題の概念を明らかにするには、文頭遊離の位置にどのような要素が立ちうるか、あるいは立ちえないか、という文頭遊離要素の容認可能性を検討しなければならない。

§ 1.3 文頭遊離要素と同定可能性

まず、文頭遊離の位置に立つ要素に制約がある場合から検討しよう。文頭遊離要素が定名詞句である場合には容認可能性に問題がないことは、これまで見た例からも明らかである。これに対して、文頭遊離要素が不定名詞句である場合には制約があることが、一般に指摘されている。

- (14) a. Un homme, ça travaille pour nourrir sa famille. (Corblin, p. 30)
 b. Un garçon ça-attend pas devant la porte, ça-entre tout de suite. (Lambrecht, p. 61)
 (15) a. *Un homme, il prend la main de l'enfant. (Corblin, p. 30)
 b. *Un garçon il-attend devant la porte. (Lambrecht, p. 61)
- (14) a, b における不定名詞句は総称的な解釈を受ける不定名詞句であるから

容認可能であり、(15) a, bにおける不定名詞句は特定のな解釈を受ける不定名詞句であるから容認不能である、とされる。このことは、すでに、文頭遊離要素を定名詞句か不定名詞句かという形態的特徴によって定義づけることはできないことを示している。総称性および特定性の概念は、定性、不定性とは異なり、意味的概念であり、この意味的概念の相違によって文頭遊離要素の容認可能性に差が出てきているからである。

ここで、文頭遊離要素が特定のな解釈を受ける不定名詞句である場合には容認不能であるという、(15) a, bが示すデータの意味を考えなければならない。果たして、不定名詞句が特定のなものであるから、文頭遊離要素として容認不能なのであるか。もしそうであるならば、*certain*のような不定形容詞あるいは代名詞は、不定冠詞 *un* とは異なり、特定のという意味を語彙的意味としてもっているから文頭遊離の位置には現われないはずであるが、実際はそうではない。

- (16) *On avait transformé les gares qui la desservait en dépôts ou cafés. Certaines, on les avait laissées intactes.* (Larsson, p. 31)

Larsson は、例文(16)が容認可能であるのは、*certaines*が *totalité de gares le long d'un certain chemin de fer* という定性をもった集合に属していると感じられるからである、という主旨の説明を与えているが、*certaines*が特定のな指示対象をもつということには変りがない。

例文(15) a, bが容認不能であるのは、文頭遊離要素が特定のな解釈を受ける不定名詞句であるからではなくて、むしろ逆に、特定のな解釈を受けることが困難であるため、聞き手が文頭遊離要素の指示対象を同定できないからであると考えられる。何故、特定のなことが困難であるかと言うと、おそらく、文頭遊離の位置が文的環境の影響を受けにくい統辞的に独立した位置であるからと思われる。不定名詞句はそれ自体では特定のではありません、文的環境の影響を受けて特定のな解釈を受けるのである。不定名詞句が、文頭遊離の位置ではなく、文的環境の影響を受けやすい主語の位置にある場合には、特定のな解釈を受けうるので、つぎの例が示す通り、容認可能となる。

- (17) a. *Un homme prend la main de l'enfant.*
b. *Un garçon attend devant la porte.*

総称的解釈を受ける不定名詞句を文頭遊離要素としてもつ例文(14) a, bが

容認可能であるのは、聞き手が文頭遊離要素の指示対象である人間というクラスの観念を同定できるからである⁹。別の言い方をすれば、文意からして、聞き手は人間というクラスの観念を同定するだけで十分であって、個別的な人間を同定する必要がないからである。この点から例文(15) a, bを見直してみると、文意から文頭遊離要素が個別的な人間を指示していると考えられるにもかかわらず、聞き手はその個別的な人間を同定できないから容認不能なのである。それでは、何故、例文(16)は容認可能なのであるか。これは、*certaines* が個別的な複数の駅を指示しているけれども、*certaines* の語彙的意味から特定のという意味が明示的に表現されているため、聞き手は具体的にどの駅であるかを同定できなくても、手続きをふめば同定可能であるという情報を与えられていることで満足することができるからである。

以上の検討から、聞き手が文頭遊離要素の指示対象を同定することができない場合、その文頭遊離要素は容認不能となる、と言うことができよう。Corblin (1979, p. 30) が挙げているつぎの四例に対しても、同じ説明を与えることができる。

- (18) **Cinq soldats, ils tombèrent dans une embuscade.*
- (19) **Quelques hommes, ils lui viennent en aide.*
- (20) **Tout homme, il aime travailler.*
- (21) **Aucun homme, il n'aime travailler.*

例文(18), (19)における文頭遊離要素 *cinq soldats, quelques hommes* は、文頭遊離の位置という統辞的に独立した位置にあるため、同定可能な個別的な指示対象を表わすことができないから容認不能なのである。つぎの例が示すように、*cinq soldats, quelques hommes* が主語の位置にある場合には、同定可能な個別的な指示対象を表わしうるため容認可能である。

- (22) *Cinq soldats tombèrent dans une embuscade.*
- (23) *Quelques hommes lui viennent en aide.*

例文(20), (21)が容認不能であるのは、*tout homme, aucun homme* が同定可能な人間というクラスの観念を指示しえないからである。*tout homme, aucun homme* がクラスという意味的にまとまった観念を指示しえないことは、代名詞 *il* によって受けられないということからも明らかである。したがって、例文(20), (21)は、二重の意味で、容認不能なのである。このことは、

tout homme, aucun homme が主語の位置にある場合と比較してみると、更によく理解されるであろう。

(24) *Tout homme aime travailler.*

(25) *Aucun homme n'aime travailler.*

主語の位置は、文頭遊離の位置とは異なり、指示対象の同定可能性という条件が必ずしも要求されない位置であるということが観察される。

これまで見てきた文頭遊離要素は、すべて、名詞句の例であった。しかしながら、主題を表わす文頭遊離の位置に立ちうるのは、名詞句のみには限らない。文頭遊離構文における代名詞の存在が示している通り、代名詞化可能なものは文頭遊離の位置に立ちうるのである。

まず、つぎの例は、前置詞を先立てる句が文頭遊離要素になっている場合である。

(26) *De la prison, on en sort vivant, pas de la guerre.* (Larsson, p. 35)

(27) *Seulement des arbres, je m'en méfiais aussi.* (Ibid.)

(28) *De cette table, on en avait cassé le pied.* (Ibid.)

(29) *En Angleterre, elle y a été deux fois.* (Ibid.)

この場合、これまで扱った名詞句の場合と形態的に異なる点は、文中で果たす統辞的役割が明示されているということである。その結果、意味的に異なる点は、対比の効果を生むという点にあると観察される。

つぎの例は、形容詞が文頭遊離要素になっている場合である⁵⁾。

(30) *Sublimes, ils l'étaient, mais pour moi.* (Larsson, p. 37)

(31) "Ah, les sixièmes, quel bonheur, ils sont si mignons..." répétait le chœur des enseignants. *Mignons, certes ils l'étaient.* (Ibid. p. 13)

(32) *Doué, il l'est un peu!* (Hagège, p. 16)

(33) *Faciles à lire, les œuvres de Joyce ne le sont guère.* (Larsson, p. 38)

なお、形容詞が文頭遊離要素である場合、主題ではなく説述が文頭遊離されているのではないかという疑問が起こるが、この疑問は文が否定文である例文

(33)のような場合を観察することによって解消される。(33)における説述は否定的内容であるから、文頭遊離要素の *faciles à lire* は説述ではありえない。

つぎの例は、動詞不定詞が文頭遊離要素になっている場合である。

- (34) *Repasser des chemises, il ne le fait pas très souvent.* (Larsson, p. 38)
- (35) *Au dernier soir de votre vie, aurez-vous une pensée pour Dieu? Croire aux hommes, c'est beau, mais lorsqu'on les quitte, il n'est pas interdit de s'interroger sur l'au-delà...* (Radioscopie, I, p. 160)

さらに、文でさえも文頭遊離の位置に現われる。

- (36) *Combien de personnes se trouvaient dans la pièce, je l'ignore.* (Larsson, p. 23)
- (37) *Votre mère vit toujours, vous l'avez dit tout à l'heure.* (Radioscopie, IV, p. 105)

以上のような、名詞句以外の文頭遊離要素の場合にも、同定可能性という特徴はあてはまるであろうか。名詞句以外の場合にも指示対象という語を用いるならば、上に見た例文(26)～(37)における文頭遊離要素の指示対象は、代名詞という枠の中に入りうるまとまった意味内容であり、同定可能である。興味深いことは、主題の概念に関する従来の分析が専ら名詞句を対象にしてきた結果、容易に談話レベルでの考察へ移って行ったと考えられる点である。この節で見た名詞句以外の文頭遊離要素の場合、同じ指示対象をもつ言語形式を先行文脈に求めるという方向性は出て来難いであろう。

本節においてこれまで検討してきたことから、文頭遊離要素のすべての型に共通する特徴、いわば最大公約数は、既知性ではなく、指示性の明確さ、いいかえれば同定可能性であることが明らかになった。文頭遊離要素は、同定可能性という条件を満たすことによって、文レベルにおいて、容認可能となるのである。

§ 1.4 ま と め

文頭遊離要素は常に主題を表わすのであるから、前節において文頭遊離要素について明らかにしたことは、主題の概念を明らかにする性質のものである。

文頭遊離要素が同定可能なものでなければならない、という条件は、何を意味しているのであろうか。これは、まさしく、「何かが述べられる対象となるもの」という伝統的定義の妥当性を示しているのである。「述べられる対象となる」ためには、その対象が同定可能なものでなければならないのは、当然の理である。主題の概念は、純粹に意味的な概念であり、文頭遊離要素という主題の最も明確な表現形態においてさえ、代名詞化するものという消極的な形態的規定しか許さない性質の概念である。

以上、文頭遊離要素の検討を通じて、主題の概念のいわば最大公約数が同定可能性という特徴であることを明らかにした。この同定可能性という主題の概念は、「語られる対象」といういわば内包をもっているのである。

§ 2.0 文末遊離構文の機能

文末遊離要素が何を表わしているのか、に関しては、主題を表わすという主張が一般的である。たとえば、Hagège (1978, p. 17) は、文末遊離要素は「後置された主題」(thème postposé) であると考え、Larsson (1979, p. 20) は、文頭遊離構文の機能が「主題を示すことであり、主題について次に何かを語る」ことにあるのに対して、文末遊離構文の機能は「文脈から既に分かっている主題を背景に回すことである」(mettre à l'arrière-plan un thème déjà connu par le contexte) と述べている。また、Lambrecht (1981, p. 76) は、文末遊離要素を *antitopic* とよび、この *antitopic* という用語を採った理由として、「この用語が主題構文と問題の構文との間に成り立っている平行関係を見事に捉えている」という理由を挙げていることから、この用語は、実質的には、後置された主題を表わしていると考えられる⁹⁾。

このような一般的な主張に共通して見られる考え方は、文頭遊離構文と文末遊離構文を鏡像関係にある二つの構文と見る考え方である。本稿の主張は、文頭遊離構文と文末遊離構文は鏡像関係にあるのではなく、文頭遊離構文における遊離要素が意味レベルに属する主題という概念を表わすのに対して、文末遊離構文における遊離要素は情報レベルに属する補足的情報という概念を表わしているということである。

§ 2.1 文末遊離要素は主題ではない

文末遊離要素が「後置された主題」であるとする Hagège (1978, p. 17) が挙げているつぎの例を見よう。

- (38) a. *Les enfants, ça se met à la crèche.*
 b. *Ça se met à la crèche, les enfants.*
- (39) a. *Jean, il m'a dit que j'avais raison.*
 b. *Il m'a dit que j'avais raison, Jean.*
- (40) a. *Une auto neuve, on doit la soigner.*
 b. *On doit la soigner, une auto neuve.*

それぞれの対を見ると、確かに、aとbは鏡像関係をなしていると考えたくなる。しかし、この鏡像関係は全く形態上のものにすぎないのである。aの文における主題が文頭遊離要素によって表わされているのは明白なこととして、bの文における主題は、文末遊離要素が担っているのではなく、強いて言うならば、(38) bでは主語の *ça*, (39) bでは主語の *il*, (40) bでは直接目的語の *la* なのである。bの文の文末遊離要素が主題を表わしているように見えるのは、偶々、その先行代名詞が主題であるからにすぎないのである。

Hagège が挙げている文末遊離構文の例は、先行代名詞が主語および直接目的語の位置を占めている例であったが、つぎの例は、文末遊離要素の先行代名詞が文の直接構成要素ではない場合である。

- (41) *Et son intelligence n'allait pas plus loin, au père Quandieu.*
 (Larsson, p. 36)
- (42) *J'ai connu la fille qui lui a écrit hier, à Georges.*
- (43) *Hier j'avais le temps et j'en ai lu la moitié, de ce livre.*

例文(41)～(43)の文末遊離要素の先行詞は、それぞれ、主語名詞句中の所有形容詞 *son*, 関係節中の人称代名詞 *lui*, 等位節中の中性代名詞 *en* である。これらの先行代名詞が主題を表わすとは言い切れないであろう。とすれば、それに応じて、文末遊離要素も主題を表わすとは考えにくい。もし、これらの文末遊離要素が主題の後置されたものであるとするならば、そのままの統辞的形態で文頭遊離の位置にも立ちうるはずであるが、事実はそうではない。

- (44) **Et au père Quandieu, son intelligence n'allait pas plus loin.*
 (Larsson, p. 36)
- (45) **A Georges, j'ai connu la fille qui lui a écrit hier.* (Larsson, p. 55)
- (46) **?De ce livre, hier j'avais le temps et j'en ai lu la moitié.* (Larsson, p. 55)

例文(44)～(46)が容認可能になるためには、文頭遊離要素が後続の文との統辞

的關係をもたない名詞句という独立した形態をとらなければならない。

- (47) *Et le père Quandieu, son intelligence n'allait pas plus loin.*
(Larsson, p. 36)
- (48) *Georges, j'ai connu la fille qui lui a écrit hier.*
- (49) *Ce livre, hier j'avais le temps et j'en ai lu la moitié.*

ここで注意しなければならないことは、例文(47)～(49)の名詞句の形態をもった文頭遊離要素と例文(41)～(43)の前置詞という統辞的役割を示す要素を含んだ文末遊離要素は、全く別物であるということである。例文(47)～(49)の文頭遊離要素は、後続の文中の代名詞とは異なり、文中での統辞的役割をもたない独立した要素であるのに対して、例文(41)～(43)の文末遊離要素は、先行代名詞が文中で担っている統辞的役割をそのまま持ち越している。したがって、例文(47)～(49)の文頭遊離要素が主題を表わすからといって、例文(41)～(43)の文末遊離要素もまた主題を表わすというように考えてはならないのである。

さらに、文末遊離要素が主題を表わさないことの証拠として、文頭遊離要素と文末遊離要素を共に持つ文が可能であることを指摘することができる。つぎの例は、別個の論点をもつ Dupont (1985) から借用したものである。

- (50) *Pierre, je lui en ai parlé la semaine dernière, de cette affaire.*
(Dupont, p. 62)
- (51) *Gérard, c'est son frère, à Gilbert.* (Dupont, p. 248)
- (52) *Pierre, il y est allé hier, à Paris.* (Dupont, p. 252)

これらの例文において主題を表わしているのは文頭遊離要素であるから、文末遊離要素は主題を表わさないということになる。

§ 2.2 文末遊離要素は補足的情報を表わす

前節において文末遊離要素が表わすものが主題ではないということを明らかにした。それでは、文末遊離要素は何を表わすのであろうか。文末遊離要素は補足的情報を表わすのである。このことは自明のようであって、必ずしも自明のことではない。なぜなら、前節において既に述べたように、文末遊離要素の先行代名詞が、偶々、主題性の高い主語あるいは直接目的語の位置を占めることが多いため、文末遊離要素自体が主題を表わすという主張をしがちであるからである。文末遊離要素は、主題性の高い主語あるいは直接目的語のみでな

く、主題性の低い、文の直接構成要素ではない要素を先行代名詞として持つことを観察しなければならないのである。このことを考慮に入れて、文末遊離要素が一定して持っている特徴は何かということを考えなければならない。以下、文末遊離要素が表わすものが情報レベルに属する補足的情報という概念であることを、文頭遊離構文と対比しながら、明らかにして行くことになる。

§2.2.1 文末遊離要素が補足的情報を表わすということの論拠として、まず、文末遊離要素と先行代名詞が同一の節に属していなければならないという制約が挙げられる。文頭遊離構文の場合においては、つぎの例に見られるように、文頭遊離要素は統辞的に独立しているため、文頭遊離要素と代名詞は同一の節に属してなくてもよく、いわば遠い関係でありうる。

- (53) *Et le père Quandieu, son intelligence n'allait pas plus loin.* [= (47)]
 (54) *Georges, j'ai connu la fille qui lui a écrit hier.* [= (48)]
 (55) *Ce livre, hier j'avais le temps et j'en ai lu la moitié.* [= (49)]

これに対して、文末遊離要素は、その先行代名詞がもつ統辞的役割をそのまま持ち越しており、先行代名詞が属している節から切り離すことはできない。つぎの例は、Lambrecht (1981, p. 81) が挙げている例である。

- (56) a. *Les films qui le-passionnent, Pierre, is-ont tous été interdits.*
 b. **Les films qui le-passionnent is-ont tous été interdits, Pierre.*

つぎの例は、Cowper (1979, p. 75) が挙げているカナダのフランス語の例である。

- (57) a. *L'idée qu'on doit l'écouter, ce maudit bloke, me fatigue à mort.*
 b. **L'idée qu'on doit l'écouter me fatigue à mort, ce maudit bloke.*

これらのデータが示していることは、文末遊離要素は、補足的情報であるからこそ、補足する領域を間違えれば、容認不能な文が出来上るということである。

§2.2.2 つぎの論拠として、文末遊離要素は対比の機能を担うことができないという事実を挙げることができる。つぎの例が示す通りである。

- (58) a. *A Pierre j-ui-donnerai un livre, à Marie j-ui-offrirai des fleurs.* (Lambrecht, p. 86)
 b. **J-ui-donnerai un livre, à Pierre, et j-ui-offrirai des fleurs, à Marie.* (Ibid.)
- (59) a. *Ce livre-là, je l'aime bien, mais celui-ci, je le trouve détestable.* (Larsson, p. 18)
 b. **Je l'aime bien ce livre-là, mais je le trouve détestable, celui-ci.* (Ibid.)

対比というものは一種の焦点化といってよいものであるから、情報構造の面から見ると、主要な情報が担うものである。文末遊離要素が対比の機能を担えないのは、その情報上の補足的性格によるのである。

なお、Corblin (1979) は、文頭遊離構文と文末遊離構文の機能に共に *emphase* という語をあてているが、これには異論のあるところである。Corblin は *emphase* の内容を明らかにしていないが、少くとも焦点化の機能を文末遊離構文が担えないことは確かである。つぎの例は、その傍証となるものである。

- (60) *Pourtant, j'avais au cœur comme un objectif secret: c'est peut-être en soldat que je la verrais, cette France...* (Radioscopie, IV, p. 90)
 (61) *C'est Pierre qui l'a cassée hier, la fenêtre.*
 (62) *C'est hier qu'il l'a cassée, la fenêtre.*

これらの例において焦点化の操作を受けているのは、先行の文中のそれぞれ *en soldat, Pierre, hier* であるから、文末遊離要素が焦点を担っていないことは明らかである。

§ 2.3 文末遊離要素は新情報を含まない

文末遊離要素は補足的情報を表わすという主張を裏付ける論拠を前二節において述べたが、文末遊離要素の特徴として、この補足的情報は新情報を含まない、ということがある。Lambrecht (1981, p. 91) が挙げているつぎのようなデータは、このことを明らかにする性質のものである。

- (63) a. *Même ses amis l'ont-abandonné.*

- b. *I-l-ont abandonné, *même ses amis*.
- (64) a. Il-a-menti à sa femme aussi.
b. *I-lui-a-menti, *à sa femme aussi*.
- (65) a. Il-a-fini presque la moitié.
b. *I-l-a-fini (sic), *presque la moitié*.
- (66) a. El-a-mangé seulement du fromage.
b. *El-en-a-mangé, *seulement du fromage*.

Lambrecht は、a 文と b 文の容認可能性の相違は、基本的には、主張と前提の相違によるのではないかという示唆を与えている。Lambrecht のこの示唆を敷衍すれば、b 文の文末遊離要素は、その先行代名詞の存在が示しているように、指示対象の存在を前提としているので、余分な新しい情報を含みえないということになる。いいかえれば、文末遊離要素は、先行代名詞の指示対象が何であるかを補足的情報の形で明示するにとどまるのである。

§ 2.4 文末遊離構文は「話し手本位」の構文である

文末遊離構文を特徴づける性質として、この構文が「話し手本位」の構文であるということがある。このことを理解するために、まず注意しなければならないことは、文末遊離要素の先行代名詞が常に既知要素であるわけではないということである。確かに、代名詞を用いるということは、その指示対象が何であるかを話し手が聞き手にとって既知のものであるとみなしているということである。しかし、このことは、あくまでも、形態的なことであって、実際には聞き手にとって代名詞の指示対象が既知のものではないということは十分にありうることである。話し手は聞き手が代名詞の指示対象を同定しているか否かに関して確信がもてないからこそ、文末遊離の位置に補足的情報を付け加えるのである。すでに述べたように、話し手がまず先行代名詞を用いるということは、その指示対象が何であるかを話し手は聞き手にとって既知のものであると、いわば一方的に、査定しているわけであるから、この意味において、文末遊離構文は「話し手本位」の構文なのである。

序ながら、文末遊離構文が「話し手本位」の構文であるとするならば、文頭遊離構文は、まさしく、「聞き手本位」の構文である。文頭遊離構文のつぎの例

- (67) *Pierre, il n'est pas venu.* [= (1)]

における文頭遊離要素 *Pierre* は、まさしく、話し手がこれから語る対象である主題を聞き手に、後続の文から統辞的に独立した有標の形態で、明示するものである。この意味において、「聞き手本位」の構文であると言えるであろう。「話し手本位」か「聞き手本位」という区別は、言語伝達が話し手と聞き手の両者の存在を前提とする以上、勿論、相互排他的な区別ではありえないが、文頭遊離構文と文末遊離構文のそれぞれを特徴づけるためには有効な区別であるように思われる。文頭遊離構文と文末遊離構文は、鏡像関係をなしているのではなく、「聞き手本位」か「話し手本位」という点で対称的な関係にあると言えよう。

文末遊離構文が「話し手本位」の構文であることを明らかにするように思われる現象に、感嘆文の後に文末遊離要素が現われやすいということがある。

(68) *Qu'il est beau, ce tableau!*

(69) *Ben, voilà, tu sais tout. Je n'ai plus rien à me reprocher. Eric, à table! Ce que c'est bon, un foyer!* (Cousin cousine, ふらんす, 4, 1978, p. 31)

(70) *Et elle disait! (...Comme c'est simple, l'amour!)* Et moi, je ne l'ai pas écoutée! (Les enfants du paradis, ふらんす, 3, 1978, p. 52)

これに対して、文頭遊離は、文頭に感嘆の標識をもついわゆる感嘆文中においては困難である。

(71) **Que, ce tableau, il est beau!*

(72) **Ce que, un foyer, c'est bon!*

(73) **Comme, l'amour, c'est simple!*

このことは、感嘆文が本質的に話し手本位である性質の文であるということに起因しているように思われる⁹⁾。

なお、文末遊離構文が話し手本位の構文であるということ、および文末遊離要素が補足的情報を表わすという主張は、文末遊離構文が書き言葉においては用いられないという事実をも説明できるように思われる。書き言葉においては、書き手は読み手に自分の伝達内容を表現するのに十分な時間と余裕をもっていると考えられるので、補足的情報という形で文末遊離要素を付け加える構文を用いることはないのである。

§ 2.5 文末遊離要素は後想 (afterthought) ではない

文末遊離要素が補足的情報を表わすということを主張してきた。それでは、文末遊離要素の先行文は何を表わすのであろうか。文末遊離構文全体が情報構造をなしていると考えれば、文末遊離要素の先行文は主要な情報である、という主張をしたくなる。しかしながら、主要情報と補足的情報という二つの情報から成る情報構造をもつという主張をすることは困難であるように思われる。前節で述べた、文末遊離構文が話し手本位の構文であるという主張は、文末遊離要素の先行文が話し手が聞き手に伝達したいという意味において、むしろ聞き手本位とも言える主要情報を成すという主張をすることを許さないように思われるからである。実際、文末遊離要素は、補足的情報として、先行文が成す主要情報全体に付け加えられるのではなく、先行文が含んでいる代名詞のいわば中身が何であるかを明示するという部分的な係わり方しか持たないのである。文末遊離要素は、先行文中の代名詞に関する確認のための補足的情報なのである。いいかえれば、主要情報と補足的情報という二つの情報単位が線状的に並んで一つの情報の全体を構成しているのではなく、文末遊離構文全体が一つの情報単位であって⁷⁾、その内部で文末遊離要素が補足的情報として先行文の代名詞に局所的に係わっているのである。

文末遊離要素が後想 (afterthought) であるというかなり一般的な考え方があがあるが、この直観的には説得力があるように思われる考え方は、文末遊離要素が独立した情報単位をなすような印象を与える点において、妥当ではない。文末遊離要素の先行文中にすでに代名詞が存在するという事実からも、先行文を発した次の段階で初めて、文末遊離要素を付け加えることを話し手が決定するという、単なる思いつきであるということは考えにくいことである。

§ 2.6 文末遊離構文の使用動機

文頭遊離構文の場合、文頭遊離要素は主題を表わすのであるから、文頭遊離構文の構文としての機能は「主題化」という積極的な機能である、と言うことに異議を唱える者はいないであろう。これに対して、文末遊離構文の場合、文末遊離要素が補足的情報を表わすということから、文末遊離構文が「補足的情報化」という積極的な機能をもつ、という主張をすることは困難であるように思われる。なぜなら、文末遊離構文においては、話し手が、いわば「言いたいこと」をまず先に言って、その後補足的情報の形で、先行代名詞の指示対象を明示する要素を文末遊離の位置で付け加える、と考えることができるからで

ある。したがって、話し手本位の構文である文末遊離構文においては、文末遊離構文の先行文が先に発せられることの方に積極的な意味があるのであり、文末遊離要素はいわば「後回し」の形で発せられるのである。

それでは、文末遊離構文の使用動機と言えるものは何であろうか。

第一に挙げる使用動機は、先行代名詞の指示対象が何であるかをいわば「念のために」補足的情報の形で付け加えるという動機である⁹⁾。したがって、この場合、文末遊離要素は、つぎの例文が示す通り、先行文脈から既に知られている事項である。

- (74) Qu'est-ce que tu cherches? / Dors...La valise. / Il part demain, Etienne? / Tu le sais bien. / Papa l'a prise, *la valise*. / Pourquoi? / Pour le Mont de Piété. (Gervaise, ふらんす, 3, 1987, p. 69)
- (75) Elle est seule sur la photo. / Non, une photo qu'on recolle, qu'on cache, c'est qu'on y tient. / Je suis désolé Ferrot, mais là, c'est du délire! / Non, c'est un souvenir. Et l'on n'a pas de souvenirs, seule! Il a bien fallu que quelqu'un la prenne, *cette photo*. (Police Python 357, ふらんす, 10, 1978, p. 29)
- (76) Ecoutez, ça suffit maintenant, je sais très très bien ce que vous allez nous dire, vous allez nous parler de notre passé, hein notre maudit passé, ah il pèse sur nous, *notre passé*. (Un amour en Allemagne, ふらんす, 1, 1986, p. 85)
- (77) Le danger, à votre avis, ce n'est pas l'érotisme? / Ce n'est pas du tout un danger, *l'érotisme*. C'est même très bien. Mais il ne faut pas le vendre sur le marché comme des légumes. (Radioscopie, I, p. 30)

第二に、文末遊離要素の指すものが先行文脈に明示的には現われていないことがあるが、それを「補うため」に、文末遊離要素の存在が必要不可欠になる。先行文は、第一の場合に比べて、より話し手本位であり、文末遊離要素は「念のため」ではなく、必要不可欠なのである。つぎの例が示す通りである。

- (78) J'imagine qu'il y a plein d'idées dans votre tête? / Il y en a toujours beaucoup. J'ai une tête qui bouillonne continuellement. Ça fourmille, *les idées*... (Radioscopie, I, p. 79)
- (79) Lorsque je suis entré en prison, un certain Pouillon est mort. Lorsque je suis arrivé en Algérie, un autre Pouillon est né.

- Malheureux? Ça existe, *le bonheur*? (Radioscopie, I, p. 211)
- (80) Je veux dire que si tu acceptes de m'aider ... nous pourrions peut-être ... / Sortir d'ici? Tu n'y penses pas? Tu les a regardés, *ces murs...et ces barreaux*? (Un condamné à mort s'est échappé, ふらんす, 2, 1982, p. 38)
- (81) Mais vous pensiez à Zatopek qui, lui, était sixième. / Je croyais qu'il était deuxième. Je ne me suis pas retourné et longtemps, j'ai cru qu'il était derrière moi. Je ne me suis retourné qu'une fois, à vrai dire. quand j'ai entamé le sprint ... J'avais l'impression de m'envoler, de ne pas toucher le sol. C'était fantastique, *de couper ce fil*. (Radioscopie, IV, p. 107)
- (82) Ben, voilà, tu sais tout. Je n'ai plus rien à me reprocher. Eric, à table! Ce que c'est bon, *un foyer*! [= (69)]

第三に、形態的な理由から、いわば「やむをえず」文末遊離を行なう場合がある。つぎの例において文末遊離要素を代名詞の位置に置いてみると、容認度が低い文が出来上ることに気付かれるであろう。

- (83) Si je peux pas plaisanter avec la mort, alors avec quoi je peux plaisanter? ! Parce que...tu trouves pas ça désagréable, toi, *que tout puisse être écrit*? (Un autre homme, une autre chance, ふらんす, 6, 1978, p. 29)
- (84) Tu trouves ça normal *qu'ils aient laissé cette enfant seule*? (L'argent de poche, ふらんす, 9, 1976, p. 8)
- (85) Vous trouvez ça bien, vous, *de ... photographe*? / Je suis photographe...je photographie, c'est mon métier. (Un autre homme, une autre chance, ふらんす, 6, 1978, p. 26)

文末遊離構文の使用動機として三つの場合を指摘したが、これですべての使用動機を網羅しているかどうかは明らかなことではない。なぜなら、使用動機は、語用論のレベルに属することであり、容易に規則性を見出すことを許さない性質のものであるからである。最後に指摘したい興味深いことは、文末遊離構文の機能と使用動機の関係についてである。文頭遊離構文の場合、その機能は極めて明確な主題化という機能であった。そして、その使用動機は、本稿では考察しなかったが、機能とは明確に区別しうる性質のものである。これに対して、文末遊離構文の場合、機能と使用動機とが明確に区別され難いように思

われる。既に述べたように、文末遊離構文の機能が「補足的情報化」という積極的な機能であるとは言い難いからである。文末遊離構文の機能が積極的でなく、かつ、統一的でない分だけ、使用動機が機能の領域に入り込んで来ている、という言い方をすることもできるであろう。いずれにせよ、確かなことは、結果として、文末遊離要素が補足的情報を表わすということである。

§3. ま と め

文頭遊離構文に関しては、文頭遊離要素が表わす主題の概念を考察した。主題の概念は、純粹に意味的な概念であり、形態的には規定できない性質のものであるが、文頭遊離の位置においては、統辞的に独立した最も明確な形で、現われている。しかし、このいわば特権的な位置においてさえ、積極的な形態的規定を許さず、ただ代名詞化可能なものという消極的な形態的規定しかできないのである。文頭遊離の位置における主題の概念の一定した特徴、いわば最大公約数は、同定可能性ということである。この同定可能性という特徴こそが、まさに、主題が「何かが述べられる対象」であるという伝統的定義の妥当性を裏付けるものである。なぜなら、「何かが述べられる」ためには、聞き手がその「対象」をそれと認知、同定する必要があるからである。

文末遊離構文に関しては、文末遊離要素が一般に考えられているような「後置された主題」ではなく、補足的情報を表わすということを主張した。文頭遊離構文と文末遊離構文は鏡像関係をなしているのではなく、文頭遊離要素が意味上の概念である主題を表わすのに対して、文末遊離要素は情報上の概念である補足的情報を表わしているのである。

注

- 1) 本稿では文末遊離要素が代名詞である場合は扱わない。
- 2) たとえば、Barnes (1985) 参照。
- 3) このほか topic の概念の定義については、Galambos (1980), Reinhart (1982) 参照。
- 4) 文頭遊離の位置という文的環境の影響を受けにくい、統辞的に独立した位置にある不定名詞句が、特定のな解釈を受けにくいのに対して、総称的な解釈は受けうるということは、興味深いことである。このことは、不定冠詞が指示機能ではなく記述機能をもつということと関連があるように思われる。不定冠詞が記述機能をもつという主張については、Furukawa (1986) を参照のこと。
- 5) 英語の分野においても、たとえば Halliday (1967, p. 239) は、文末遊離要素を marked theme あるいは delayed theme であるとしている。
- 6) 感嘆の標識の外で文頭遊離を行なった文は容認可能である。Un foyer, ce que c'est

bon! L'amour, comme c'est simple! これらの文においては、文頭遊離要素の部分が聞き手本位であり、後半のいわゆる感嘆文の部分が話し手本位であると言うことができよう。

- 7) 文末遊離構文が一つの単位をなすという主張は Larsson (1979, p. 17) にも見られる。Larsson は、文末遊離構文のイントネーションの型の点から正当化を行なっている。
- 8) この動機については、Prandi (1985) 参照。

REFERENCES

- Barnes, B. K. (1985): *The Pragmatics of Left Detachment in Spoken Standard French*, Pragmatics & Beyond VI: 3, John Benjamins Publishing Company.
- Chafe, W. L. (1976): "Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view", in *Subject and Topic*, ed. by Ch. Li, Academic Press, New York, pp. 25-56.
- Corblin, F. (1979): "Sur le rapport phrase-texte, un exemple: l'emphase", in *Le français moderne*, 47^e année, n°1, pp. 17-34.
- Cowper, E. (1979): "Right dislocation in Franco-Canadian", in *Papers from the fifteenth regional meeting*, ed. by P. Clyne et al., CLS, pp. 70-78.
- Dupont, N. (1985): *Linguistique du détachement en français*, Peter Lang.
- Furukawa, N. (1986): *L'article et le problème de la référence en français*, France-Tosho.
- Galambos, S. J. (1980): "A clarification of the notion of topic: evidence from popular spoken French", in *Papers from the parasession on pronouns and anaphora*, ed. by J. Kreiman et al., CLS, pp. 125-138.
- Hagège, Cl. (1978): "Du thème au thème en passant par le sujet, pour une théorie cyclique", in *La linguistique*, vol. 14, fasc. 2, pp. 3-38.
- Halliday, M. A. K. (1967): "Notes on transitivity and theme in English", Part II, in *Journal of Linguistics*, 3, pp. 199-244.
- Lambrecht, K. (1981): *Topic, Antitopic and Verb Agreement in Non-Standard French*, Pragmatics & Beyond II: 6, John Benjamins B. V.
- Larsson, E. (1979): *La dislocation en français, étude de syntaxe générative*, Etudes romanes de Lund 28, CWK GLEERUP.
- Li, Ch. & Thompson S. (1976): "Subject and topic, a new typology of language", in *Subject and Topic*, ed. by Ch. Li, Academic Press, New York, pp.457-489.
- Prandi, M. (1985): "Expansion et thématization", in *Semantikos*, vol. 7, n°2, pp. 3-22.
- Reinhart, T. (1982): "*Pragmatics and Linguistics, An Analysis of Sentence Topics*", reproduced by the Indiana University Linguistics Club.
- Wagner R. L. & Pinchon, J. (1962): *Grammaire du français classique et moderne*, édition revue et corrigée, Hachette, Paris.